

# 第6回蕎麦蘊蓄の旅

## 山形そば街道を訪ねる

平成13年11月17日(土)～18日(日)

第6回蕎麦蘊蓄の旅は、初の貸切バスで、平成13年11月17日(土)から18日(日)の両日、山形県最上川沿いの「山形そば街道」と寒河江市でユニークなそば打ち活動をしている「ふるさと寒河江そば工房」を訪ねた。会員23名が参加し、蕎麦の蘊蓄と親睦を深めた旅模様を報告します。

1日目：11月17日(土)

旅立ちチャーターバスで

午前7時、出発地の「さいたま新都心」は、晩秋の朝陽がすがすがしい。まだ人も車も疎らな「さいたまスーパーアリーナ・彩の国街道」前の路上脇に停車しているチャーターバスには、分桜流の面々が三々五々集まる。

6回目で初めての”貸切りバスによる旅”とあって、皆小学生みたいに浮き浮きしているようだ。

バスは岩槻ICから東北自動車道に入り、1時間ほど走り、佐野SAで最初の休憩タイム。一同、朝食その他の”お勤め”などを済ませ、晴れ晴れとした心地でいざ山形・村山地方へ向かう。

心は早くも”元祖・田舎蕎麦処”へ

分桜流の面々を乗せたバスは、黒磯PA、福島松川PAに立ち寄り、村田JCTから山形自動車道に入り、寒河江ICから国道287号に出て「最上川三難所そば街道」にある元祖・田舎そば処「あらきそば」を目指す。

午後1時前、古い萱葺農家の店構えで佇む「あらきそば」に辿り着いた。が、「新そばまつり」中の人気店とあって、千客万来、40分ほど待たされ、やっと入れた店内は、店構えに違わず、野郎畳、木の引き戸・障子、囲炉裏、裸電球、大きな卓袱台などをしつらえ、懐かしさを誘う昔づくりの和室。30人分くらいの客座布団がある広さだ。張り出し品書きには、和紙に墨書きで「板そば”うすもり””むかしもり”」だけが認められる。



楽しいバスの旅で小学生気分



あらきそばのお品書き

「あらきそば」はツルツルではなく、モグモグ噛む。

分桜流の面々は、名物のニシンの味噌煮で、先ずは昼酒一杯飲みながら、お目当ての板そばを待つ。お出ましの「板そば・うすもり」は、秋田杉桁目の箱（52cm×21cm）に、割り箸ほどの太さの地粉・生粉打ちそばが、底板が見えるほどに薄く盛られており、「おかず」の漬物も付く。この倍量が「むかしもり」だ。

侮るなかれ！「うすもり」でも都会の大盛りを凌ぐ、たっぷり盛りだ。辛汁は、鰹、鯖出汁で薄めの都会風といった味だ。分桜流の面々は、家族連れでにぎわう卓袱台の一角で、「うすもり」をモグモグと口に運んでいる。”量と食感”に目を白黒させている顔もあった。ある食エッセイストが”山形の田舎そば”について曰く、「この地の太打ち田舎そばは、おかずを食べながらモグモグと噛み締めて食べるのが美味しい。つまり、そばはご飯なのである。原初的なそばの食べ方だ。」と納得がいく。



板そばを喰らう



うーん 食べ応えがある・・・

雨模様の中、最上川船下り遊覧                      ヨーイヤサノマガーショ/エーンヤコ  
ラマーガセ 碁点はやぶさレ三ヶ瀬も ヨイトコラサノセ・・・

分桜流の面々は『あらきそば』での昼食後、民謡・舟歌でも知られる『最上川三難所船下り』を楽しんだ。

日本三急流の一つの船着場は、生憎の雨模様の上、川の水嵩も多く、ビニール仕立ての屋形船の船下りは、スリルと絶景にいまひとつ趣を欠く、50分ほどであった。



雨の中の船下りもおつなもの？

### 旅籠は山あいの一軒宿

船下り船着場からバスで羽州街道（国道13号）を北の山あいに入ると、20分で一軒宿「湯船沢温泉旅館」に着く。

この温泉宿は、初代が文政2年（1819年）に湯を掘り当てて開湯。建物は築150年の合掌造り。「緑豊かな山あいの”癒しの湯やど”として、インターネットなどでファンが広がっている」と17代目の現当主は語る。

宿は分桜流の貸切状態で、「アルカリ泉質の”美人の湯”ともいわれます。」と聞き、一同早速風呂場へ。

夕餉の宴に現れた湯上りの面々は、皆、心なしか肌がすべすべにリニューアルされたようだ。

名物の鯉料理、地元山里産の山菜料理・栗ご飯などを賞味しながら、般若湯少々？とそば蘆薈を交えた四方山話で、親睦を深めた。宴の後、閑静な山あい併せ、一同、清遊を守り（といっても遊ぶところも無し）床に就く。



### 旅程2日目：11月18日（日）

#### 「かやぶき集落」を訪ねる

分桜流23人衆は、午前7時前、山あい昇る朝陽に急かされて起床。

朝風呂、朝餉の後、旅支度も早々に、旅館前に勢揃いし記念写真をパチリ。宿の人から「裏山を30分くらい歩くと、20件ほどの萱葺集落がある。」と聞きつけた”元気印”の10人ほどの面々は、8時過ぎから次々と杣道（そまみち）ウォーキングに出かけていった。残りのバス組みは、迂回路をヨッコラ、ヨッコラと合流地に向かった。萱葺屋根のオンパレードに一同「いまどき、こんなに多くの屋根の葺き替えは、手間とかや集めが大変だろうなあー」と感嘆しあった。

寒河江市・道の駅「チェリーランド」へ

バスは、村山市の山あいから羽州街道を隣接の寒河江市へ向かう。最上川水系寒河江川沿いの敷地(22万㎡)につくられた「チェリーランド」に着く。

この道の駅には観光物産センター、さくらんぼ会館など7つの施設がある。

なぜか、オスマントルコ風建物の「トルコ館」もある。案内書に「西洋と東洋の接点地、トルコ文化を満喫できる。」とある。思わぬところでトルコとの親善に接することができた。



地元「素人そば打ち会」と交流

分桜流の今回の旅の目的の一つは、この「さくらんぼ会館」内に事務局を持つ『ふるさと寒河江そば工房』との交流である。同工房とは、光工房の鈴木氏の紹介で知り合い、初訪問である。

分桜流23人衆は、同工房の松田伸一会長(綿店経営)、大沼保指南役(三段、サクランボ栽培)等から「発足のいきさつ、今後の計画」などの話を聞いた。同工房は、市勤労青少年ホームの有志が、JA婦人部OG会有志に「家庭に伝わるそば打ちの技」を教わりながら、野外活動で「そば打ち」を始めたところ評判となり、地元JA観光農業課が「サクランボ狩とそば打ちをセットにした観光商品に」と乗り出し、「そば打ち」部門のメンバー25人が約120日専門家から特訓を受け、平成7年4月「ふるさと寒河江そば工房」の名で発足した。

今後は、寒河江市に「全日本素人そば打ち大会」を誘致するのが目標。手始めに平成14年11月「段位認定大会」を開催することを予定している。

チェリーランドを後に、帰路へ

分桜流23人衆は、同ランド内のレストランで思い思いの昼食のあと、寒河江川河川敷公園内にある「さくらんぼ会館」の”体験そば打ち教室”で、大沼さんらの指南振りを見学した。

旅の終わりの記念写真は出羽三山に望む寒河江川河川敷公園の一角で撮り、  
帰路のバスに乗り込む。



寒河江ICから山形、東北自動車道を走り、途中3回の休憩を挟み終着地「さいたま新都心」に18時過ぎに無事着き、旅は終わった。

ともあれ、今回の「蕎麦蘊蓄の旅」は、原初的なそばの”味と技”を教えてくれた「あらきそば」。官・民・素人・玄人挙げて「町興し」の「ふるさと寒河江そば工房」活動は、分桜流と違ったポリシー。など、蘊蓄を深めた旅であったといえる。

文：安西 広      構成：阿部成水